かえるの王さま

グリム兄弟

楠山正雄訳

一

むかしむかし、たれのどんなのぞみでも、おもうようにかなったときのことでございます。

あるところに、ひとりの王さまがありました。その王さまには、うつくしいおひめさまが、たくさんありました。そのなかでも、いちばん下のおひめさまは、それはそれはうつくしい方で、世の中のことは、なんでも、見て知っていらっしゃるお日さまでさえ、まいにちてらしてみて、そのたんびにびっくりなさるほどでした。

さて、この王さまのお城のちかくに、こんもりふかくしげった森があって、その森のなかに一本あるふるいぼだいじゅの木の下に、きれいな泉が、こんこんとふきだしていました。あつい夏の日ざかりに、おひめさまは、よくその森へ出かけて行って、泉のそばにこしをおろしてやすみました。そして、たいくつすると、金のまりを出して、それをたかくなげては、手でうけとったりして、それをなによりおもしろいあそびにしていました。

ある日、おひめさまは、この森にきて、いつものようにすきなまりなげをして、あそんでいるうち、つい

まりが手からそれておちて、泉のなかへころころ、ころげこんでしまいました。おひめさまはびっくりして、そのまりのゆくえをながめていましたが、まりは水のなかにしずんだまま、わからなくなってしまいました。泉はとてもふかくて、のぞいてものぞいても、底はみえません。

おひめさまは、かなしくなって泣きだしました。するうちに、だんだん大きな声になって、おんおん泣きつづけるうち、じぶんでじぶんをどうしていいか、わからなくなってしまいました。

おひめさまが、そんなふうに泣きかなしんでいます

と、どこからか、こうおひめさまによびかける声がしました。
「おひめさま。どうなすったの、おひめさま。そんなに泣くと、石だって、おかわいそうだと泣きますよ。」
おや、とおもって、おひめさまは、声のするほうをみまわしました。そこに、一ぴきのかえるが、ぶよぶよふくれて、いやらしいあたまを水のなかからつきだして、こちらをみていました。
「ああ、水のなかのぬるぬるぴっちゃりさん、おまえだったの、いま、なにかいったのは。」と、おひめさまは、なみだをふきながらいいました。「あたしの泣い

ているのはね、金のまりを泉のなかにおとしてしまったからよ。」
「もう泣かないでいらっしゃい。わたしがいいようにしてあげますからね。」
「じゃあ、まりをみつけてくれるっていうの。」
「ええ、みつけてあげましょう。でも、まりをみつけて来てあげたら、なにをおれいにくださいますか。」
「かわいいかえるさん。」と、おひめさまはいいました。
「おまえのほしいものなら、なんでもあげてよ。あたしのきているきものでも、光るしんじゅでも、きれいな宝石でも、それから金のかんむりでも。」

「いいえ、わたしはそんなものがほしくはないのです。けれど、もしかあなたがわたしをかわいがってくだすって、わたしをいつもおともだちにして、あなたのテーブルのわきにすわらせてくだすって、あなたの金のお皿から、なんでもたべて、あなたのちいさいおさかずきで、お酒をのましていただいて、よるになったら、あなたのかわいらしいお床（とこ）のそばで、ねむってよいとおっしゃるなら、わたしは水のなかから、金のまりをみつけてきてあげましょう。」と、かえるはいいました。

「ええ、いいわ、いいわ。金のまりをとってきてくれ

さえすれば、おまえのいうとおり、なんでもやくそくしてあげるわ。」と、おひめさまはこたえました。そういいながら、心の中では、（かえるのくせに、にんげんのなかま入りしようなんて、ほんとうにずうずうしい、おばかさんだわ）と、おもっていました。

かえるは、でも、約束（やくそく）のとおり、水のなかにもぐって行きました。しばらくすると、ちゃんと金のまりを口にくわえて、ぴょこんとうかび上がってきました。

そして、

「さあ、ひろってきましたよ。」

そういって、草のなかにまりをおきました。ところ

が、おひめさまは、そのまりをつかむなり、ありがとうともいわず、とんでかえって行きました。

かえるは大声をあげて、

「まってください、まってください。」といいました。「わたしもいっしょにつれてって。わたしはそんなにかけられない。」

けれど、かえるが、うしろでいくらぎゃあ、ぎゃあ、大きな声でわめいたって、なんのたしにもなりません。おひめさまは、てんでそんなものは耳にもはいらないのか、とッとッとうちのほうへかけだして行ってしまって、かえるのことなんか、きれいにわすれていま

した。

かえるは、しかたがないので、すごすご、もとの泉のなかへもぐって行きました。

二

そのあくる日のことでした。

おひめさまが、王さまや、のこらずのごけらい衆（しゅう）といっしょに、食事のテーブルにむかって、金のお皿でごちそうをたべていますと、そとでたれかが、ぴっちゃり、ぴっちゃり、大理石のかいだんを上がってくる音

がしました。そして、上まで上がってしまうと、戸をとんとんたたいて、
「王さまのおひめさま、いちばん下のおむすめご、どうぞこの戸をあけてください。」という声がしました。
おひめさまは立ち上がって行って、たれかしらみようとおもって、戸をあけますと、そこに、きのうのかえるが、ぺっちゃりすわっていました。
おひめさまは、ぎょっとして、ばたんと戸をしめるなり、知らん顔で席にもどりました。でも心配で心配でたまりません。おひめさまが胸をどきどきさせているのを、王さまはちゃんと見ておいでで、

「ひいさん、なにをびくびくしておいでだい。戸のそとに、大入道(おおにゅうどう)の鬼が来て、おまえをさらって行こうとでもしているのかい。」とたずねました。

「あら、ちがうの。」と、おひめさまはこたえました。

「大入道の鬼なんかじゃないわ。でも、きみのわるいかえるが来て。」

「そのかえるが、おまいにどうしようというのだね。」

「あの、おとうさま、それはこういうわけなのよ。あたし、きのう、いつもの森の泉のところであそんでいましたらね、金もまりが水のなかにころげおちました。それであたしが泣いていると、かえるが出てきて、ま

りをとってくれましたの。それから、かえるがしつっこくたのむもんだから、じゃあお友だちにしてあげるって、あたしかえるに約束してしまいました。まさか、かえるが水のなかから、のこのこやってこようとは、おもわなかったんですもの。それが、あのとおりやって来て、なかへ入れてくれっていうんですもの。」

そのとき、またろうかの戸をとんとんたたく音がしました。そうして、大きな声でよびました。

いちばん下の　おひめさま、
あけてください　たのみます。

つめたい泉の　わくそばで、
きのう　やくそく　したことを、
あなたは　おぼえて　いるでしょう。
いちばん下の　おひめさま、
あけてください　たのみます。

するとき王さまはいいました。
「それはおまえがいけないね。いちどやくそくしたことは、きっとそのとおりしなければなりません。さあ、はやく行って、あけておやり。」
おひめさまはしぶしぶ立って、戸をあけました。と

たんに、かえるはぴょこんとびこんで来て、それから、おひめさまのあとについて、ひょこひょこ、いすの所までやってきました。

かえるは、そこにしゃがみこんで、上をみながら、「わたしも、そのいすに上げてください。」といいました。おひめさまがもじもじしていると、おとうさまがまた、かえるのいうとおりしておやりといいました。おひめさまはしかたなく、かえるをいすにのせてやりました。

するとかえるがまたいいました。

「どうぞ、わたしを、テーブルの上にのせてください。」

おひめさまが、かえるをテーブルにのせてやると、こんどは、
「さあ、その金のお皿をずっとわたしのほうによせてください。そうするとふたりいっしょにたべられるから。」といいました。
おひめさまは、かえるのいうとおりしてやりました。ほんとに、かえるが、ぴちゃぴちゃ、さもおいしそうに舌づつみうってたべているそばで、おひめさまは、ひとくちひとくち、のどにつかえるようでした。
かえるはたべるだけたべると、おなかをまえへつきだして、

「ああ、おなかがはって、ねむくなった。おひめさま、さあ、わたしをあなたのおへやにつれて行ってください。かわいらしい、あなたのきぬのお床のなかで、わたしはゆっくりねむりたい。」

おひめさまは、もうがまんができなくなって、しくしく泣きだしてしまいました。ほんとに、ぬるぬる、ぴちゃぴちゃ、さわるのもきみのわるいかえるが、おひめさまのきれいなお床のなかで、ねむりたいなんていうのですもの、おひめさまがかなしくなるのもむりはありません。

するとまた王さまが、

「泣くことがあるか。たれでも、こまっているとき、たすけてくれたものに、あとで知らん顔するのは、いけないことだよ。」といいました。

おひめさまは、さもきみわるそうに、指のさきでそっとかえるをつまみあげて、上のおへやまでもって行くと、そっと隅(すみ)っこにおきました。そうして、じぶんだけが、お床にはいってしまいました。

ところが、かえるは、さっそく、のこのこはいだしてきて、

「ああくたびれた、くたびれた。はやくゆっくりねむりたい。さあ、そこへ上げてください。でないと、お

とうさまにいいつけるから。」といいました。

　これでおひめさまは、すっかり腹が立ちました。そこでいきなりかえるをつかみ上げて、ありったけのちからで、したたか、壁（かべ）にたたきつけました。

「さあ、これでたんとらくにねむるがいい。ほんとにいやなかえるったらないよ。」

　ところで、どうでしょう。かえるは、ゆかの上にころげたとたん、もうかえるではなくなって、世にもうつくしいやさしい目をした王子にかわっていました。

　さて、この王子が、おひめさまのおとうさまのおぼしめしで、おひめさまのお友だちでも、おむこさまで

あることになりました。そのとき、王子はあらためて、じぶんの身の上の話をして、あるわるい魔法つかいの女のためにのろわれて、みにくいかえるの姿にかえられたが、それを泉のなかからたすけだして、もとのにんげんにかえしてくれるものは、この王さまのおひめさまのほかになかったといいました。それで、あしたはもうさっそく、ふたりつれだって、じぶんの国にかえって行くつもりだともいいました。

三

それでふたりはゆっくりやすみました。そして、あくる朝、お日さまがにこにこ、ふたりをお起しになるじぶん、八頭（とう）だての白馬をつけた馬車が、はいって来ました。どの馬も、あたまに白いだちょうのはねをかぶって、金のくさりをひきずっていました。馬車のうしろには、わかい王さまのごけらいが、しゃんと立っていました。これが忠義もののハインリヒでありました。

　忠義もののハインリヒは、鉄のたがを三本も胸にまきつけていました。それは、ご主君（しゅくん）がかえるにされてしまったので、かなしくてかなしくて、いまにも胸が

はれつしそうになったので、やっとたがをはめて、おさえていたのです。たいせつな王さまが、もとの姿にかえったので、きょうさっそく、八頭だての馬車が、おむかえにきたのです。忠義もののハインリヒは、おふたりを馬車のなかに入れてあげて、じぶんはまた馬車のうしろにしゃんと立ちながら、ご主君のまた世に出たことをおもって、ぞくぞくするほどうれしくてなりませんでした。

　さて馬車がすこしはしりだしたとおもうころ、王さまのお耳のうしろで、ぱちり、ぱちり、なにかはじける音がしました。わかい王さまはそのとき、うしろを

ふりかえっていいました。

「ハインリヒ、　馬車がこわれるぞ。」

「いいえ、　いいえ　お殿（との）さま、
あれは馬車では　ござんせぬ。
せっしゃのむねに　はめたたが。
殿さま、　げえろにならしゃって、
ぎゃあぎゃあ、　泉でなかしゃるで、
はりさけそうな　このむねを、
むりにおさえた　そのたがが。」

それでも、ぱちり、ぱちり、また二どもはじける音がしました。わかい王さまは、そのたんびに馬車がこわれるのではないかとおもいました。けれども、それはやはり、ご主君がにんげんにかえって、たのしい日をおくられることになったので、ふさがっていたハインリヒのむねが、ひらけたため、胸のたがが、はれつして、とびちる音でございました。

底本：「世界おとぎ文庫（グリム篇）森の小人」小峰書店
　　１９４９（昭和24）年２月20日初版発行
　　１９４９（昭和24）年12月30日４版発行
※原題の「DER FROSCHKÖNIG ODER DER EISERNE HEINRICH」は、ファイル冒頭ではアクセント符号を略し、「DER FROSCHKONIG ODER DER EISERNE HEINRICH」としました。
※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

入力：大久保ゆう
校正：浅原庸子
２００４年４月29日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。